エチオピア西南部における庭畑の利用に関する研究

平成 17 年度入学
派遣先国：エチオピア連邦民主共和国
宮田　寛章

キーワード：庭畑、エンセーテ、エチオピア西南部、標高

対象とする問題の概要

エチオピア西南部にはバショウ科の作物であるエンセーテを主要な構成要素とした庭畑を家屋の周りに発達させた地域が広く分布している。これらの庭畑では主食作物として重要なエンセーテとともに、しばしば様々な作物が混作され、また多目的に利用される樹木や半栽培植物も多く存在する。

このようなエチオピア西南部における庭畑に関する先行研究は、資源植物の種類とそれに対応した利用法の目録作成のような定性的側面の記述にとどまってきた。また主要構成要素であるエンセーテについての先行研究の多くはエンセーテの作物学的特徴を明らかにしたものであり、庭畑を単位にしてその栽培が生業としての農業にしめる位置を検討したものは少ない。また庭畑のおかれたグローバルかつ地域的文脈を的確にとらえた研究も少ない。

研究目的

以上の問題意識をふまえて①、②を本研究の目的とする。

①庭畑の資源植物について、資源植物学的な定性的記述にとどまらずに、利用頻度・量や管理の程度など資源利用の定量的側面の記述をおこなうことで、庭畑の資源植物と人々との相互作用の実相を浮かび上がらせ、人々の生計にとって庭畑がどのような空間であるかを描く。

②①での科学実証的理解をふまえたうえで、地域の生態・社会・文化的文脈の中に庭畑を位置づけ、地域における庭畑の多重的な意味を明確化する。

フィールドワークから得られた知見について

フィールドワークはエチオピア西南部のオモ系農耕民であるアリの居住域において行った。庭畑はアリ語でティカ・ハーミ（ティカ＝エンセーテ、ハーミ＝畑）、その外側に位置する穀類・豆類畑はウォニ・ハーミ（ウォニ＝農業に関する一定の重度のある労働）と呼ばれることで、二つの農地空間が民俗的に分類・認識されている。また高度の比較的低い場所はアリ語でダウラ（標高約 1600m～1800m）、比較的高い地域はディジ（標高約 1800m～）と呼ばれ、標高によって異なる生態環境が民俗的に分類・認識されている。今回のフィールドワークでは、これら二つの民俗的高度区分において庭畑の地図を描く（庭畑内の資源植物を庭畑の地図上にプロットする）ことで、その構成要素を明らかにした。

ダウラのティカ・ハーミはエンセーテの他にヤム、タロなどの主食となる根栽作物が個体数として多数を占める。主食作物以外では換金作物として重要なコーヒーや、コーヒーの被陰樹となり、薪として

も重要なマメ科木本 *Milletia ferruginea* が多い。その他にも果樹、薪となる樹木、半栽培植物など多種類の資源植物が存在するが個体数は少数である。庭畑の各有用植物はそれぞれに排他的な区画に生育することはまれで、混作的な景観を呈している。

ダウラの庭畑内

ダウラとディジの間に位置する中間高度域ではダウラと比べて構成要素に占めるエンセーテの割合が高くなる。また両高度区分に生育する種を構成要素として含み、種数はダウラと比較してそれほど変化せず、ダウラと同様に混作的である。

さらに標高の高いディジとよばれる地域になると、多くの作物の栽培限界の気温以下となるために種数が急激に減少し、構成要素のほとんどがエンセーテとなることで、エンセーテの単作畑のような景観を呈する。

ディジの庭畑内

ディジの庭畑の外観

今後の展開・反省点

今回の調査では庭畑の地図を作成して、その上にすべての個体をプロットすることによって、資源の量的な情報、及び資源の空間配置をあきらかにした。これは本研究の重要な基礎的資料となる。今後はこの資料を基礎にして、人々による庭畑の植物の利用や管理について定量的にあきらかにし、さらに、上記の①で述べた、人々と庭畑の資源植物の相互作用に関する議論をさらに進める予定である。